

Special Essay

自然の恵み

医学部看護学科

原 頼子

9月のお彼岸が近くなり、やっと日中の気温が下がり、暑かった夏が終わろうとしています。しかし、我が家にはこの夏の暑さのおかげでひとつ収穫がありました。車庫の屋根に枝を広げている巨峰がとてもおいしい実をたくさんつけたことです。「巨峰は素人が育てるものじゃない。プロでも育てるのは難しい。」と言われているくらいなので、今までこの巨峰は、袋がけもしないかわりに、実がなっている姿を観賞用として楽しむことがほとんどで、味はこんな感じかな・というものでした。しかし、今年の夏は、何が影響したのでしょうか、太陽の光が十分降り注いだこと、暑くて害虫が育つことができなかったこと、台風の被害がなかったことなどの良い条件が重なり、甘く熟す時季に邪魔されなかった結果、とても甘い実がつくことになったようです。おかげで、うちの車庫は、散歩の人がこの巨峰に目を留め、話をしながら、味見をするちょっとした社交場のようになっていました。今までの巨峰の人生最大の目立ち具合だったかもしれません。

植物に話しかけると育ちが早いという説もあります。それは、人間が吐き出した二酸化炭素を植物は吸って成長するからということです。そして、植物が吐き出してくれた酸素を吸いながら、人がぶどう棚の下で笑顔で語り合う光景がまた、ぶどうに甘みを加えたのでしょうか。何はともあれ、植物に対し愛情を持って、きめ細やかに世話をすることと、そのことがきっかけとなり、人と人との輪ができたことはすばらしい事実でした。この巨峰を植えた今は亡き姑は、来客をもてなすことが好きでしたので、今年のように人が集まっているところを見たらきっととても喜んだことでしょう。

忙しい毎日の中で、ゆっくり周りを見回すこと、起こっていることに気持ちを向けること、日々の生活を大切にすることは、緊張で気が抜けない現場にいる私たちにとって、忘れてはならないことだと考えるきっかけとなった、自然の恵みに感謝した夏でした。

